
GAの世界へようこそ！

冬泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GAの世界へよつこむ！

【著者名】

ZZマーク

N7934E

【作者名】

冬泉

【あらすじ】

GREYHAWK - ANOTHERとは、異世界エルスに於けるエーリック大陸、その東部であるフラネース地方にて幾多の冒険者が体験した物語の基礎となる設定の解説です。GREYHAWK - ANOTHERの他の物語を読む際の参考にどうぞ。

御挨拶

皆さま、GREYHAWK ANOTHER (GA) の世界へようこそ。この世界で紡がれる物語は、旧TSRと言つ米国のゲーム会社が創った『WORLD OF GREYHAWK』（灰色の鷹）の世界に於いて、RPG (Role Playing Game) をベースとしたNRPSS (Net Role Play Stations、ネットにてプレイするロールプレイゲーム) のプレイ記録を小説化したものです。この複雑なGAの世界を紐解く為、以降に種々解説を載せていきたいと思います

主要世界の地図

下記のサイトに『THE WORLD OF GREYHAWK』のオリジナル地図が掲載されております。GREYHAWK ANOTHERの世界も、地図はこれに準拠しております。

<http://www.nirgal.com/games/rpg/greyhawk/bigmap>

GA - 01 「歴史と年号」

歴史と年号

GAの世界は、全てコモン歴（COMMON YEARS、『C Y』と略します）を基準としております。このコモン歴は、エーリック大陸で当時最大最強であった『GREAT KINGDOM』（上王国）の最初の上王（Over King）の即位年をコモン歴元年とする年号で、今ではエーリック大陸の東部諸国で広く使われております。

GAは、実地でで十一年に渡つて実地プレイされた二つの年代をベースにしています。

第一紀	『封印戦争』時代	コモン歴585年～
第二紀	『暗黒戦争』時代	コモン歴764年～

間が二百年弱開いている第一紀と第二紀では、当然の事ながら登場人物が異なります。また、同じ時代で進められている物語自体も、年代的に数ヶ月～数年の時間差があります。

それ故に、物語をお読みになる場合、まずは現時点で一番年代が古い『魔性の瞳』からお読みになることをお勧めします。この物語に出てくる『魔剣士エリアド』と『夢見姫レムリア』を軸に、第一紀の他の物語をお読みになれば、このGAの世界がより理解し易いでしょう。

コモン歴の他には、古代スール帝国で使用されていたスール歴、
漠羅爾歴^{パクラニ}旧王朝で使用されていた漠羅爾歴^{パクラニ}、フラン歴などがあります。

現在では、イースタンではもっぱらコモン歴が使用されていますが、
ウェスタンではまだ漠羅爾歴パクリーが使われています。

GA - 02 「世界と名称」

世界と名称

GAは、『エルス』(OERTH)という惑星の、『エーリック』(OERIK)という大陸をベースにした物語です。エーリック大陸は、パクラニ漠羅爾新王朝六力国のある“西側部分”をウェスタン、コーランド王朝、ヴェロンディ連合王国、グレイト・キングダム(上王國)などがある“東側部分”をイースタンと呼称します。

エルスには二つの月、即ち近い方の月『ルナ』(LUNA)と遠い方の月『セレネ』(CELENE)があります。ルナはエルスを二十八日周期で、セレネは九十一日周期で周回しております。ひと月はルナが満ち欠ける二十八日、或いは七日間からなる四週間で構成され、セレネが満月になる三ヶ月毎に一週間の『祭り』(FESTIVAL)となります。即ち、一年間は十一ヶ月 + 四週間(祭り×四回)の合計十三ヶ月となります。尚、各月にはエルス独特の名称が付けられています。

8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月
夏の祭り	RICH FEST	WEAL SUN (陽光)	FLOCK TIME (芽吹)	PLANTING (種蒔)	GROW FEST	COLD EVEN (平温)	READYING (準備)
REAPING (刈取)	GOODMONT H (良好)						

9月	HARVESTER (収穫)
秋の祭り	BREW FEST
10月	PATCHWALL (修繕)
11月	READY'SREAT (木枯)
12月	SUNSEBB (日没)
冬の祭り	NEEDFEST

また、一週間には下記の名称が付けられています。『神の日』には、自分が信仰してゐる神の神殿に行って祈りか労働奉仕を行い、『休の日』には自由に休息を取る、といつ日常になつております。

星の日	STAR DAY
日の日	SUNDAY
月の日	MOONDAY
神の日	GODSDAY
水の日	WATERDAY
地の日	EARTHDAY
休の日	FREEDAY

GA - 03 「基礎設定」

基礎設定（キャンペーンワールド、GREYHAWKについて）

GREYHAWKとは、旧TSR社が最初に出した公式キャンペーンワールド設定である『THE WORLD OF GREYHAWK FANTASY SETTINGS』を意味します。これは、GREYHAWKと言う世界の解説した“基礎資料集”です。

GREYHAWKの公式世界には、後年幾つかの追加資料（FROM THE ASHES、GREYHAWK WARS、GREYHAWK ADVENTURES、各モジュール類）が加わりました。しかしながら、このGREYHAWK ANOTHER（GA）の世界は、最初の設定資料集に基づいて世界構築を行つており、後年に発売された追加資料集は一部しか反映させておりません。これには理由があります。

私がベースとしているGAの世界は、基本的に所属していたゲーム・サークルで1987年から1997年まで実地プレイされた“歴史”にかなりの部分を負っています。そこでプレイされたGREYHAWKは、最初の資料集の最終年月を出発点としてキャンペーンを実施しており、その資料集に不足する部分をDungeone Master達が付け足す形でその歴史を継伸させてきました。この結果、後年に追加資料が発表されても、既に独自の歴史が誕生している関係で、新規資料の導入が簡単にはいきませんでした。

このGAの世界も幾つかの独自解釈と独自設定を生かす為に公式設定を一部スキップしています。特に、歴史関係はコモン歴579年以降、かなりの部分が独自のものとなっています。更には、私が

ゲーム・サークルを離れた1997年以降は、別の手段にてプレイするRPG（NRP）をスタートしたことにより、1997年次点で時間停止していた歴史を再度活性化し、これまで通常のシナリオではフォローし切れていた部分にスポットを当てました。それにより、各PC、NPCの人物像、歴史的背景などが一層深耕していました。この時点で、GAはゲーム・サークルでの実地プレイ時代のGREYHAWKを離れ、独自の道を歩き出していると形容しても良いかと思います。

現在のGAは、神古から現代（最も新しい時代はコモン歴800年代）までの歴史をGAのものとして再構築すると共に、私なりにGREYHAWKの曙から日没まで、一つの世界の物語として表現できればと考えています。

神古の時代

「神古の時代」とは、GAでは『創世の時代』に当たります。ある時から、惑星『エリス』（OERTHと書きます）に“創世神”（BUILDER、ビルダー）と呼ばれ、本当の意味での“神”的域にある超存在が現れ、この世の全ての理の礎を創造しました。これら“創世神”は、後世の“神”（所謂GOD、時間の枠組みから外れた存在だが、必ずしも万能ではない）と呼ばれる存在と明確に区別されます。

“創世神”と呼ばれるその超存在達は八柱（光・闇・地・水・火・風・時・命の八柱）が存在し、それぞれが司る領域にその創造力を注ぎました。こうして、惑星『エリス』上で基盤が形成されました。各種族も誕生して、徐々にその数を増やしていきました。

この“創造の瞬間”から暫し年月が過ぎ、世界全体が安定して各種族が発展の軌道に乗った後、ある時期を境に、“創世神”達のプレゼンスはエルスから急速に希薄になっていきました。これまでには、神殿に行けば誰にでも“創造神”的声が聞けたところが、神官からの“語り掛け”でなければ、応答が来ることが希になったのです。

世界に住まう各種族は、こうして徐々に“創造神”に依存する生活様式から、自分たちで考えて解決する生活様式に変わっていきました。それに伴い、これまで特に差がなかつた各種族間の暮らしにも変化が生じ、各種族別に分かれて生活する傾向が強まっていきました。

上古の時代

GAに於けるエルスの歴史では、神古の時代に続く時代を『上古の時代』と称しています。この時代は、凡そBC15000～BC5000（BEFORE COMMON YEARの略）の間続き、“創世神”（Builder）のエリスに対するプレゼンズが徐々に薄れていった期間でもあります。“創世神”たちからの示唆が減少していったこの時代の人々は、神を忘れない為に持てる全てを注ぎ込み、神々に最も近い都 後世ではWest Heaven（西方樂土）と呼称される壯麗な大都市『上都』を、“創世神”たちが最初にその足跡を記したと言われる地に建立しました。全ての種族が集まると、一人の神官王、四人の大祭司と十二人の大賢者を選びだしました。聰明で思慮深い彼らが治めるこの煌びやかな都は繁栄を謳歌し、永遠にこの時代が続くかと思われていました。

何時の頃からか、人々に一つの“声”が聞こえてくる様になりました。その声は、“創世神”達のプレゼンスの減少に伴い、徐々にその存在感を増していました。“時の声”と称されるようになつていったそのメッセージは、上都の人々の間に根付くと共に、單一の言葉を話す全ての人々の間にゆっくりと広まっていきました。それと同時に、人々の考え方、暮らし方は変化を遂げていきました。質素から華美へ。謙虚から顯示へ。献身から支配へ。公平から搾取へ。誠実から利己へ。人々の間の感じ方、考え方、生き方に生まれた差は、坂を転げ落ちる玉の様に互いの亀裂を拡大していきました。

これ以降の部分で、後世に伝わっているのは、巨大な天変地異と共に上都が地の底深く沈んだこと、その時の大変動で时空が歪み、

互いの言葉が違つてしまつたこと そして、その全ての背後に、“暗黒神”サリズダンの影が見え隠れしていることです。上都の滅亡と共に上古の時代は終わりを告げ、神聖スール帝国と漠羅爾古王バクリー朝が力と魔導で互いに覇を唱えた中古の時代が幕を開けるのです。

中古の時代

West Heaven（西方樂土）が崩壊した後、エルス正しくはエーリック大陸上の民族の流れは、東方を目指しました。大災厄に見舞われ、大地と時間すら捻れた彼の地を背後に封印し、山脈を越え、ステップを渡り、肥沃であるうと噂される大陸東部に向かつたのです。そして、最初の大きな民族の流れが、周囲を高い山脈で囲まれた広大な土地に根を下ろし、そこに國家を建設しました。これが、神聖スール帝国（Holy Suev Empire）

この時代の片方の雄の起源です。迫り来る災厄から漸く逃れたとはいえ、その悲惨な記憶はその後も長く国民の心に影を落とし、漸くこの影響が薄れてきたのは第三代神聖皇帝の御代になってからのことでした。

BC5000からの一千年間は、神聖スール帝国は特に相対する相手もなく、平和に国造りに邁進しました。West Heavenを模した巨大な都、聖都が国の中央に建設されたのもこの時代です。神聖帝国の威光は国の隅々まで届き、国民は繁栄を謳歌していました。

その繁栄に、かげりが出来てきたのはBC3500頃からです。北の山脈（スールハート山脈）の向こう側のステップ地帯に遊牧民が集まり、徐々にその中で力を持った族長が氏族を纏め始めたのです。最初、繁栄の絶頂にあつた神聖帝国は、これらの動きに見向きもしませんでした。己が力の慢心の始まりでしょうか、この国に敵う者無し。この國の民は特別”という選民思想の兆候が、徐々に国の指導層と民の間に顯れるようになつてきました。

BC3000、北のステップ地帯で初めての王国が誕生しました。一人の若い族長が遊牧民の氏族ほぼ全てをまとめ上げたのです。その若者の名は龍王・漠羅爾リュオン・バクラー、漠羅爾古王朝の始祖でした。彼は、ドラミディ大洋沿岸に都『大都』（今の恵久美流公国首都の場所）を創ると、瞬く間に国の体制を整えていきました。そして、龍王・漠羅爾が没する迄に、神聖スール帝国の北には強力な新国家が誕生していました。

新古の時代

神聖スール帝国と漠羅爾バクラー旧王朝 二つの全く文化が異なる巨大な勢力がぶつかるのは時間の問題でした。それでも、初期の頃は互いに商業的な交流は維持されていました。神聖スール帝国から漠羅爾旧王朝へ、両勢力を分けるスルハート山脈を越えて、幾つもの隊商が神聖帝国の帝都と、王朝首府を往復していました。しかしながら、既にこの頃から文化・習慣の違いから、小さなすれ違いは生じていました。それらは、全体の大きな流れの中では問題にならないレベルでした あの惨劇が起るまでは。

B C (Before Common Year) の略) 100年。一つの漠羅爾隊商が、スルハート山脈を南北に抜ける峠道を北上しておりました。神聖スール帝国で荷を降ろし、代わりに漠羅爾旧王朝では好まれる嗜好品を満載した隊商の足取りは遅く、非常にゆっくりの移動速度でした。丁度神聖スール帝国の勢力圏を抜け、漠羅爾旧王朝の版図に入ろうとする頃に惨劇が起きました。巨大な龍に跨った黒衣の戦士が三騎、隊商を襲つたのです。短い、血生臭い戦鬪の後、隊商は壊滅。動く者が居なくなつたのを見とり、黒衣の戦士三騎はその惨劇の場所を去りました。

しかし、全滅したと思われていた隊商には、一人だけ生き残りがいたのです。最初の龍の火炎放流で吹き飛ばされて意識を失つたのが幸いし、惨劇を生き延びました。呆然として倒れた仲間の間を彷徨う内に、その者は煌めく剣の破片を見つけました。柄だけとなつたその剣には、くつきりと神聖スール帝国親衛騎士団の紋章が刻まれていました。

〔 続
く 〕

「この世の彼方の館

その館は、何処かの深い森の奥にひっそりとあつた。そこに至る者は、この世の理じとわりと、多かれ少なかれ、その命運を結び合わせた者達だった。

大きな広間の奥に切つてある暖炉からは、パチパチと薪がはぜている。その広間には、中央に大きな円卓が一つだけ置かれており、その周囲には色々な様相の者が座っていた。甲冑を身に纏つた者がいれば、優雅な夜会服を身に纏つた貴婦人がいる。こんなところに、と思う様な子供の姿もあつた。

やがて、紅い胸甲を身に纏つた女性騎士立ち上がった。はつとする様な整つた顔立ちには、鋼の様な瞳が輝いている。

「方々。」

杯を高く掲げると、その女性騎士は厳かに言った。

「一つの年が終わり、そしてあらたな年の幕が開く。来るその年に於いて、私たちを何が待ち受けるかはわからぬが　　勇気を、そして希望を失わぬ事だ。己が意思の力を信じれば、如何なる路も必ずや開けると私は思う。」

一座を見回すと、己に集中する意志と思いの力を感じる。

「それでは。私たちそれぞれの未来に、乾杯っ！」

カシャン、カシャンとグラスやマグが打ち合はされ、そして陽気な宴が始まった。

「見事なご挨拶です」

「皮肉か？」

「いいえ。本当に、そう感じましたの」

「・・・まあいい」

細いグラスを傾けると、琥珀の液体を優雅に飲む。

「ところで、姫は古き年と来る年をどう思われている？」

「はい、古き年の間は、なかなかわたくしの話も進展を見せませんでした。来る年には、少しはお話の進展を期待しておりますわ」

「そうか　だが、姫。貴女の状況はまだ良い方だ。私など、異空間時間にローラン殿と飛ばされたまま、進展無しだ」

「まあ・・・」

「少しば、その停滞空間を動かしてくれることを期待しているのだがな」

「強く願えれば、きっと叶いますわ」

「そうだな。そうするとしみつ」

「ところで、カーシャさま」

「ん？」

「どなたか、意中の方がおりまして？」

「ぐつ・・・レムリア姫、いきなり何を言つのだ？」

「いえ。ずっと独り身を通してきたカーシャさまですもの。よほど良い方がいらっしゃるからでしょう？」

「い、いや。その様な相手はおらぬ」

「やうなのですか?」「

「つむ・・・。そづ^{ツヅ}なたはどひうなのか?」

「今のお話のわたくしは、まだ「口」の意思が未分化で、わたくし自身もやきもきしていまますわ」

「そうなのか?」

「はい」

につこり笑顔を浮かべる夢見の姫に、ちょっと額に汗を浮かべる紅の龍騎士だった。

「オレらが揃つのも久しぶりだな」

「揃つと言つても、ランバルト。白の聖者様、灰の予言者様はいらっしゃっていないよ」

「我ら四名のみ」

「そつは言つてもね、ディンジル、ヒラリー。わたしたちが逢つこと自体、久しぶりでしじう。わたしは、それだけでもとっても嬉しいのだけど?」

「ダリーンの言つ通りさ。三人欠けてるけど、再会に乾杯しようぜ」「ふむ・・・まあ、良いだろ?」

四人はそれぞれのグラスを掲げると宙でチンと合させた。

「ところで、ディンジル」

「なにかな?」

「愛しのヒラリーちゃんとのヒカラの日々は・・・へぶう――!」

ヒラリーの纖手が紅の勇者の脇腹にめり込んでいた。

「おほほほ。雉も鳴かずば打たれませんわ」

「冷たいんですね、ダリエンン？」

「あら？ 白業白得でしょ、いれは？」

「・・・やつ言つておきましょ、つか」

「ライヨイ、オレの愛しの姫君と、何をくつちやべつてるんだ？」

ああん？」

いつの間にか復活してきた紅の勇者様。その隣には、涼しい顔でグラスを傾ける紫の騎士もいる。

「誤解 　といつ言葉は理解されないのでしょうね」

「あたまつよ！ オレのインテが幾つだと思つてるんだ？」

「恐竜並みだな」

「やうですよ。恐れも痛みも感じませんから、重宝するのですけれど」

おほほほ、と紫の騎士様に笑いかける蒼の賢者様。

「とにかく、ヒラリー」

「何か？」

「あなた方は、今後どうあるの？」

「使命はまだ終わっていない。使命を全うするまで、プライムに残り続けるだろ？」「

「辛くない？」

「・・・正直に言えば、辛いと感じる時もある。だが・・・むはや一人ではないからな。その辛さも耐えることが出来る」

ダリエンは、黙つてヒラリーを抱きしめた。ダリエンの温もりが、ヒラリーの心を温めた。

「あれ？　おい、ヒラリー。お前趣面替えたのか？　こつからレ
・・・」

「衝破光つ！－」

田映い光の帯が辺りを真つ白に染めると、その不埒な発言をした馬鹿者を彼方に吹き飛ばした。

たま屋あ・・・、とこりのが、その馬鹿者の恋人が漏らした口メントだったといつ。

「「Jのメンツが揃うのも久しぶりね～」
「上の方々と同じ事を仰つておりますね、マークさん」「
「いいのよ、ウイン！　何たつてアタシの廻りに世界が回ってるん
だから！」
「わあ、す、凄いねマーちゃん！」

トクイ、トクイとその薄い胸を張るのは黒髪が長い少女。その隣で両手を握つてキラキラと瞳を輝かせる小柄な少女の傍らでは、ほんわかした雰囲気の栗色の髪の少女が笑顔を浮かべている。言わずと知れた、我らがソーサリアン三人娘である。

「アタシたちメインの話つて、完全に停滞しているわね。ホント、失礼しちゃうわ」「でも、少しずつお話は進んでいますわ」「年に一回のペースでしょ！　【冗談じゃないわよ】－」

フンガーッと鼻息も荒いマール。あらあれ～と笑うウインディ。おうおうとするシャイン。二者二様だ。

「まあ、一番重要なアタシたちよ。史的にも、語的にも、欠かせないでしょ？」

「そうだよね！ ボクたち、ソーサリアンだし！」

「グレイホーク・アナザーの世界は、時が一筋の流れとなってる所。神古の時代から始まって、現在、そして未来へ。どの時代に生まれても、どの時代に生きていても　忘れられる」とはありません

「で、でも！」

「なによ、シャイン！」

「創造主さん・・・かなり忘れちゃってるみたいだよ・・・」

「え~~~~~つ！！」

悲痛な、だが何処かコミカルに聞こえるマールの悲鳴。おひおろするシャイン。ここにこ笑うワインティ。そして、ダ・カー・ポ（笑）。

「すっかり脇役、ですね」

その温厚そうな外見の青年は嘆息して言つた。

「嘆くな。我らが主たる話は、彼の第一紀大団円を持つて終わりを告げたであろう？」

「そうは言つてもですね、ルーン・・・」

青年が話しかけた相手は、見事なプラチナブロンドを肩口で切りそろえた女性だった。その隣には、長い黒髪を三つ編みに結んで肩から前に垂らした女性が微笑んでいる。二人とも、一度見たら忘れない様な強い印象を与える素晴らしい美人だった。

「・・・脇役？」

続きを言葉を言おうとして、先に入つた突つ込みにがっくりとなる青年。だが、気を取り直して、傍らに座る小さな女の子の頭を優しく撫でる。

「違うよ、ノア。正確に言つとだね、“休眠状態”っていうんだ。決して“引退”したわけじゃないよ」

「そうなんだ」

「そうとも」

そのつぶらで純粹な瞳を見ながら、青年は力強く頷いた。

「ギャラハッド。いい加減なことをノアに吹き込むなよ」「いい加減とは失敬ですね、ルーン。ほら、カーラも笑つてないで、少しルーンに言つてやつて下さいよ」

「何を言えと？」

「だからですね・・・」

「いいのだ、カーラ。コヤツが軟弱にも待つことに耐えられず、己の状態に自信を失いつつあるだけのこと」

同情の余地も無い　と続けられて、ギャラハッドと呼ばれた青年は思わず苦笑いを浮かべた。

「そこまでは言わぬよ。だが、我らが話しもソーサリアンの三人娘の話に準じてゐる。あちらが動かねば、こちらも動かないな」「然り。カーラの言う通りだ。何も、我らの人格を攻撃しているのではない。単に、更新が非常に遅いだけだ」

「・・・遅いといつてはいつものことですけどね。それくらいは

理解していくつもりですが

「不満か？」

「少しほ

ルーンに返すと、肩を少し落として戯けてみせる。

「それよりも、貴殿ら、来る年の抱負は何か？」

「そうですね　今度こそ、貴女とのラヴリーヴ話を・・・」
「！」

「冗談はよせ」

ど二かのだれかと同じく、脇腹に纖手を突つ込まれて苦悶の表情
のギャラハッド。

「雉も鳴かずば打たれまいに」

そのセリフまで同じであった。いや、浮かばれないのはどうやらも
同じか。

「私は、あの三騎龍に一矢報いてやりたいな
「同感だ、私も」

ルーンとカラーラはお互に冷え冷えする笑みを浮かべて言つ。

「あの後ろで笑っているパボニスとアスクレウスとやら。教訓を垂
れてやらぬといけない。あのままでは、曲がった大人になるからな」

すでに育ちきつているのではないかと、ギャラハッドの突つ込
みはきつぱり無視された。というわけで、哀れな青年は隣の少女に
その対象を変える。

「ノアはどうしたいのかな？」

「・・・そうね・・・。世界の平和、かな・・・？」

「世界平和…それはまたグローバルでジェネラルなことで・・・」

何処かかみ合わないまま、それぞれの想いを抱いて、四人の夜は過ぎてゆく・・・。

「姫様、こちらをどうぞ」

「ありがとうございます、パリス」

ジョフ大公国の誇る飛翔騎士の一人、トニオ・パリスが細いグラスをジョフの至宝、大公女レアランに渡した。

「二人とも、レコンキスタでは力を貸してくれてありがとうございます。心から感謝致します」

「勿体なきお言葉」

恭しく頭を垂れるのは、マリー・ケイセル。もう一人の飛翔騎士である。この二人、対照的な人物である。トニオ・パリスは陽気な小兵で、マリー・ケイセルは大柄で生真面目な女性だ。二人は、レアランを含めて、ただ三騎のジョフ飛翔騎士であつた。

「大公女様は、来る年に何を思われますか？」

「ジョフの民が、復興の苦しさに負けずに、再び住みよい、素晴らしい国を作り上げることです」

はつきりと言いたれたレアランの瞳には、強い輝きが宿っていた。

「あなたは？」

「わたしですか？ そうですねえ、今年こそ可愛い彼女を見つけて、田舎に帰つて羊の放牧でもしたいですね」

「戯れ言を」

「あ、きつぱり切られた」

にこにこ笑うトニオは、マリーに何を言われても全く気にしない様子。

「あなたは？ マリー？」

「私は、今年同様、来る年も大公女様に変わらずお仕え出来ればと思ひます」

「マリーは真面目だね」

「トニオが不真面目なのだ」

「そうですか？」

「そ・う・だ。」

「二人とも・・・」

仲が良いですね、と続けたレアランの言葉に、二人とも目をむいた。だが、優しく笑うレアランに。何時しか一人の表情も和らいでいく。

「今年も、皆で力を併せて、ジョフの復興と民の安寧に頑張りましょ

う

「勿論です」

「全力を挙げます」

チン、と合わせたグラスがその決意を祝福するかの様に鳴った。

荒くれ猛者、とでも言えそうな厳しい面構えの戦士達が四騎。何れも、大戦士グラントと共に、苦しいレコンキスタを乗り切つた一騎当千の戦士達だ。軽騎一のルー。軽騎四のマイラム。装騎のフレム。親衛騎LAGのアルノ。四人は、手に持つた杯を勢いよくガチンと合わせた。

「我々全員の為に乾杯っ！」

「ジヨフの未来の為に！」

「大公女殿下と大戦士様の為に！」

「友軍として奮闘してくれたコーランド派遣軍の盟友達の為に！」

思い思いの言葉を叫ぶ。大きな戦役を戦い抜いた漢達の表情は非常に明るかつた。

「おー、トリアノン殿っ！ こちらに来ませんか！」

目敏く見つけたマイラムが呼びかけると、近衛騎士キャルドの礼装を纏つた女性騎士が歩いてきた。

「これは皆様方。ごきげんよう」

「トリアノン殿、お疲れ様です」

「じー寧に、リュティエンス殿」

「先だっての戦役では、トリアノン殿とコーランドの盟友達のご助力、心から感謝申し上げます」

「私たちは出来ることをやつたまでです。それが、貴国のためになつたと有れば、それを大変嬉しく思います」

「本当にありがとうございます」

「カリスタン殿、頭を上げて下さいませ」

「いや、フレムやマルノの言つ通りだ。トリアノン殿、本当に感謝する」

「へえ～お姉ちゃんって凄いんだ」

唐突に、脳天気な、緊張感のない、不羈な まあともかく突っ込みが入って、ジョフの四騎士は一体だれが？って顔を上げた。

「あなたね！ いきなり失礼じゃないの！」

「ゴイン、と一発妹の頭を叩くと、肩口で髪を切りそろえた勝ち氣そうな娘が頭を下げた。

「すみません、妹が唐突に」

「貴女がたは？」

「ご紹介しますわ、カリスタン殿。妹のオルセーとシュノンソー。二人とも、コーランドの近衛騎士ですわ」

「それも、腕の立つ騎士よ～って、痛いじゃないの、お姉ちゃん！」

もう一発をオルセーから貰ったシュノンソーが抗議の声を挙げる。

「あんたわね～（怒）もう黙ってなさい！」

「う～横暴～（涙）」

「ははは・・・元気な妹さん達ですね」

さじものマイラムも田を白黒させていく。

「うふふふ、自慢の妹たちですの」

「そ・う・で・す・か・・・」

引き気味に話すフレム。その時。

「あ、姉さま！ ラーライン様が呼んでいらっしゃいます！」

「ありそつ、では、すぐに行かないと。皆さん、失礼致しますね」

「はーはーはー、『』ゆっくり」

「ぱつぱつ~い」

「あなたは黙るって言つたでしょ~」

優雅に一礼するトリアノン、シュノンソーを引っ張るオルヤー。騒がしくも目立つ三姉妹が去ると、一騎当千の勇者達は大きく溜息を付いてお互いの顔を見合わせた。そして、“オークレイダーの相手の方がましだな”と言つたとか言わなかつたとか…。

シリード・マールの真珠。パー・ランドの賢者。ラフラー宮の白き姫君。夢見の女王。などなどなど。数多の称号を帯びるこの若い娘こそ、当代きつての名君と言われるパー・ランドの女王、ラーライン・ド・パー・ランドであつた。

その女王陛下、物憂げにグラスを傾けて、一人でお座りになつてゐる。お付きが全くいないのも異例だが、まあここは安全な場所なので大丈夫なのだろう。そういうことにじつとおひつと思つ。

「皆さん、楽しまれているようね」

それはそれで良いことだけど、ヒーラインは思った。でも、自分は少し退屈してしまつてゐる。

「王陛下は、年末年始なのに、一人で龍退治に出掛けられたし…。こんなに可愛らしい、美人で賢い奥様を放つて於いて、何が楽し

「いのでじゅうつ？」

ほつ、と溜息を付く。宇宙一と名乗るだけ合つて、ラーラインの夫君であるバド国王は、猪突猛進だった。西に龍がいると聞けば、どこでも乗れる馬に乗つて突撃。東に悪漢がはびこつていると聞けば、あつといつすつ飛んで行つて現下に成敗する。そんなこんなで、家（王宮）を留守にすることが多く、ラーライン女王は寂しさを困つてこらとこう訳なのだ。

「もう・・・浮氣、でもしてしまおうかしらん・・・」

物騒な思考をひねくり回す女王陛下。それは、核ボタンでモグラ叩きをするに等しいんですけど。

「構わないわよね？ 向こうも勝手におやりになつていいし、わたくしも勝手にさせて頂きましょつか

思い立つたら吉日。ラーラインは即断即決即行動。とにかくリアクションが早かつた。ウイズが高いので単独行動は不味いと思った女王陛下、遠くに見かけたレスコー三姉妹を呼び寄せると、ルンルン気分でパーティー会場を後にした。（つて、大丈夫なんでしょうかね、これで？）

「ああ、久し振りだなあ

「おあげさですわね、兄さま」

「だつてな、考えてみるよアリサ。くだん件のキャンペーンが終わつてしまつてから、一回も出番が無かったんだぞ」

「大団円の度合いが大きかつた対象は、それだけ後での出番が少な

「いつて」とか。わかつてゐるんだろ、ユージョーヌ

「皆まで言つなよな、ギルバルト」

「そうであつても、お一人とも嬉しいのでしづ？」 また出番があ

つて「

ユージョーヌとギルバルトは、一人してちょっと決まり悪そうに顔を見合せた。

「さあさあ、今年の豊富は何でしづ、ヒツジのがお題だそつよ。兄さま、ギル、どんな抱負なの？」

「そうだな。今年こそ、カーラ殿に想いを伝える努力を多少なりとも進めよつと、ちよりと考へたくあるな、うん」

「複雑な言い方をするなよ。カーラに氣があるのは、見え見えだぞ。相手にも、伝わつてゐると思うがな」

「ホントか！ ホントにそう思ひつか！」

兄さま、キャラが違つてきてますよーと、ここで妹が心の中で涙したのは秘密だ。だいたい、この新年編、キャラが違つてきているのばかりだし（爆）。

「それは兎も角として おまえ達はどうするんだ？」「..」

「へ？」

「おまえとギルだよ。結婚するんだろ？」

「あ、ああ・・・つて、おまえ知つてたのか？」

「周知の事実だ。ラフラー宮（ローランド王宮）全体に知れ渡つてるぞ」

「むう・・・」

「早いトコ、オレン所に挑戦に来いよ。オレに勝つたら、妹との結婚を許してやるから」

「嫌がらせしてるだろ」

「他に何があるっていうんだ?」

「……で、妹がはあ、と心の中で溜息をついたのは秘密だ。いや、
ばればれだったかも知れないが。

「ともあれ! 今年こそはもつと物語に復権しよう!」
「おう! たまには良い」と言つじやないか、ゴージュームー!」
「たまには、は余計だ!」
「たまにも言わんだけ、普通は!」
「言つたなあ!」
「それがどうした!」

対峙する一人。お互いに、ゴーランドの至宝とか銘が付いている
剣に手を掛けてたりする。だが。

「いい加減にしなさ~~~~~いつ……」

あきれ果てた妹の一喝で、そんな行動は粉碎された。

「正月草々、喧嘩なんかしていると、わたしが粉微塵にしてあげま
すわよ! ほら、そんなことをやつている内にスペースが足きたじ
やない! わたし、まだ何も言つてないのにあ~!~!~!~!

チャンチャン。

「こう言つ所の登場は初めてだね」
「まともに活字化されてからから考えると、十数年は経ってるな。
その時でも、三人一緒に揃つたと言つ一行しかなかつたし

「良いのではなくって？ それだけ、世には事も無じとこり」と
しじうから

「銀の姫は余裕だな」

「そう見えますか？ 炎の騎士さま」

「見えるよ」

「まあ・・・」

笑いあう一人を見て、中に立つ青年も笑みを浮かべた。

「僕たちの意志が受け継がれて行くならば、それで良いと思ひよ。
常に、世はその時に生きる人々が決めるもの。僕たちは見守るだけ
だから」

「そうですね」

「ああ、そうだな」

穏やかに笑い合う三人は、談笑しながら黄昏れる中、世々を眺め
続けた。

「わたしにも、出番が回ってきたのね」

その少女は、ややもすれば寂しげな笑みを浮かべて言った。グレ
イト・キングダム帝都ラウクセスでも評判の酒場、BLUE RA
GOON。夜の喧噪に沈むその店の一角落に、ちよこんと座った少女
クリスは、出されたオレンジ・ドリンクにも手を付けず、じつと黙
つていた。

友達がない訳ではない。何時も、自分のことを気にかけてくれ
るランカー塾の塾生達や、磯が品かを縫つて面倒を見てくれるエリ

ザベートやフランシス、リヒター別館に詰める守護の騎士、ルテキア達もいる。

けれども

じわり、と心を浸食する寂しさが減る訳でもなかつた。

深い森の奥にあつた古い館 そこで、育つた記憶 閉じこめられたいたその深い闇の中へ、差し込んだ一條の光 すべては、まだ鮮明に覚えていた。

それでも。

一度知つてしまつた暖かみは、奈落の底の深さをより一層感じさせるだけに過ぎない。そして、より深い絶望も。

それでも・・・。

この国の民を護る為、自分は強く有らねばならない。自分といつカタチが例え崩れてしまつても、それが国民の平和をもたらすので有れば、それだけでも、嬉しく思わねばならないだらう。

決心したはずだった。

その決意が鈍るなんて

どうしてだらう? ねえ、どうしてなの? どうして、どうして、

そんなに笑顔で居られるの? わたしは、どうしたらいいの?

答えの出ない問い。

今宵も、一人の少女を涙に暮れさせて、帝都の夜は更けてゆく・。・。

「酷いものだな」

「なにが、でしょう」

「思わないか?」

「だ・か・ら・なんのことと言つてゐるの?」

「言わずと知れている」

「まあ」

「だいたいな、貴女は暢氣すぎるぞ、フランシス。今後のこの国を背負つて立つ人の嘆きを心配せずになにをぼややんとしているのだ」「あらあらあら~。わたしだって考えていますわよ~」「到底信じられないが」

この二人、誠に対照的だつた。エリザベート・▼・ルックナー。ルックナー伯爵家の令嬢にして、希代の聖騎士でもある。長い金髪に真っ青な瞳。細面の表情は美しくも凜々しく、都の話題の極の一つだつた。

そしてもう一人。肩口で切りそろえた艶やかな黒髪。大きく煌めく黒い瞳。陽気な笑みを何時も口元に浮かべるこの貴婦人はリヒタ一公爵家のお姫様、フランシス・▼・リヒターであつた。

一人は古くからの友人（エリザベート曰く、忌まわしく腐れ縁）で、一緒に行動すること多かつた。それ、今日も今日とて、新年パーティー会場にこうして一緒につるんでいる。

「いつもに増しての落ち込み振りだな」

「相乗効果なのよね~。一旦落ち込むと、連鎖反応的にどんどん落ち込んでいつてしまつのよね~あの子の場合」

「そうだな。その不憫さが忍びない」

つと皿薙を見事なレースのハンケチで押さえるリザベート。余談だが、ここら辺が女性らしさを嫌う彼女のせいやかなおしゃれなかも知れない。

「まあ、泣く子は育つって言つか」

「いわないぞ。」

フランシスの戯れ言を、きつぱり切り捨てるエリザベート。

「でもね~あのままひて立つのめ、ちょっと可哀想かもね~」「その通りだ。だが、肝心な莫迦タレが何も行動を起こさない。全く、何を考えて居るんだか・・・」

ぶつぶつ言いつらうザベートにフランシスがホンワカ笑つて立つ。

「いいのよ~。釣った魚にはエサをやらなー、ドジョウから「あほかつーー!」

ちやんちやん

「久しぶりよね~。記録を見ると、ほほー一年更新がとまつてるんだ

もん

「怠慢、ね・・・」

「やつよ、『コード』にやつてやつてやつて！」

「？」

「純粹無垢な『コード』に変な癖をつけるのは頂けないね、アンリエット」

「あのねえ～アンタには言われたくないわ、トリスタンつー。」

「まあ、それは良いとして。ホントに忘れ去られそうだね、ボクらは。と言つか、『GKの嵐』の世界 자체全てが止まってしまつてるしね」

「すつじぐ重要な時代ステップなのにねえ。結構アタシたちつて扱いが薄幸よね」

「・・・創造主にも、色々・・・事情が、あるから・・・」

「あら、お優しいことで」

「あの時代と世界全体を纏める構想はあると聞いたけど」

「“予定は未定、決定ではない”を地でいく感じね。空手形っぽい感じがブンブンするわ」

「やう言いなさんな。言つだけ惨めになるよ」

「そうだけど・・・」

「・・・他の、みんな、は？」

「アキ、ヒック、グスタフ、ジャンニ、シュヴァルツ、セリル、ドナティーン、真理査さん、V、ローター、リヒトホーヘン…エリザベートさんとフラン시스さん、カリストとレテキアの四人は来てるわね」

「何時か、また全員が揃う時があるかな」

「揃う時、じゃないの！ 揃うのよ、自分たちの意思で！」

「・・・そう、ね・・・信じていれば・・・いつか、また・・・逢える・・・」

「そうだな」

「そうね」

「では、その再会に向けて、乾杯をしておこう」

「良い考えね！ それでは！」

「・・・乾杯・・・」

『力チン』と澄んだ音を立てて、三つのグラスが交わった。そして何時の日にもか、もつと多くのグラスが交わらんことを・・・。そし

GA - 08 「新年スペシャル」（後書き）

GREYHAWK ANOTHERのキャラクター、揃い踏みです（笑）。三つの時代（第一紀、第二紀、オリジナル）からの登場ですが、既に幾つかのお話で名前が出ているキャラもいます。ご要望があれば、まだ未登場のキャラの話もアップしてみたいと思っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934e/>

GAの世界へようこそ！

2010年10月10日04時44分発行